

文芸大賞

いたわり

愛知県 進藤 拓

僕が就職したのは、平成九年、十八歳の時だった。一枚の古い集合写真。名古屋の鶴舞公園で、全員ジャージを着て楽しそうに笑っている。これは会社のなかにあった全寮制の企業内学園に入っていた時の、遠足の写真だ。じっと写真を見ていたら思い出してきた。着ているジャージ上下と履いているスニーカーは、家の近所にあった大学のゴミ捨て場から拾ってきたものだった。

僕は高校時代、廉売品の、中学生みたいな白い運動靴を履いていた。周りの友達の殆どは一流メーカーのスニーカーを履いていた。

「何買うにしても、元をただしや誰の銭か、よう考えてみい」「贅沢覚えるのは、てめえで働くようになってからいくらでもせえ」

幼い頃から、母によく言われた。貧乏だった。なにも買っ

てもらえなかった僕は、親に何かを買ってもらおうという行為に対し、非常に憶病だった。また、自分のものを自分で買うなどという当たり前の行動にも大きな罪悪感がつきまとった。入社にあたり、企業内学園でジャージとスニーカーがいると伝達されたとき、困惑した。給与はまだだし、母には頼めない。

家の近所にあった大学は恵まれた家庭の子女が行くところだった。派手な服装、高級な自動車、そんな若者たちが学び、運動に励んでいた。そのような人々を見ても、元々の人種が違うのだと自分に言い聞かせて、羨むこともなく中学の時から就職希望だった。いざ高校を出て就職し、企業内学園の寮に入るのを前にして、ふと思いついて、その大学の寮のゴミ捨て場を見に行った。予想は当たった。たくさんゴミのなかに、まだ着られそうな服や靴が山のように捨ててあったのだ。僕は、ゴミを捨てに来た大学生のような顔をして、ゴミの山をかきわけ自分のサイズに合いそうなジャージとスニーカーを見つけた。ジャージは紫の上下で、一流ブランドの品物だった。靴は人気メーカーの青いスニーカーで、以前靴屋で見たとき、欲しいと思つたら二万近くする値段が貼ってあり、それに驚いて諦めたという経緯のある品物だった。ちょうどゴミの整理をしていた清掃員の人に許可をもらって、その衣類を頂いた。

家に帰ってジャージを着てみた。新品かと思うほど綺麗で、ズボンの膝に少し穴が開いていたが、気にならない程度だった。高校の指定ジャージと比べ物にならない上質な着心地だった。スニーカーはまだ新しそうなのに、大切に履かれていなかったようで、踵は踏まれて、履き口も傷んでいたが、致命的な破れなどはなかった。履いて少し歩いてみた。驚いた。綿布団の上を歩いているような滑らかな履き心地だった。さすが二万円。少し歩いただけで足や膝に負担がかかって、節々が痛くなる安い運動靴とはまるで違った。

姿見に映る自分の姿は、爽やかな若人だった。普段から私服すら持たず、公私ともに高校の制服一着だけで過ごしていた僕、姿見の僕は、貧しさを知らぬ富裕な階級の生まれのようだ。なお姿見を凝視した。人間そのものが入れ替わったかのような若者らしい青年の姿、この心地よさは、過去の何にも比べようのないものだった。裕福な大学生たちが、まだ使えるのに愛着もなく捨てた良質な衣類を纏う僕、僕は大学生にはなれなかった人種。着ているだけで、盗んだ訳でもないのに、罪のように思えてくる。それでも、自分でも新品を買っても、低廉な粗悪品しか手に入らなかっただろうと思うと、お洒落な恰好が出来たことを嬉しく思った。そして、このジャージとスニーカーに愛着が湧いてきた。少しの穴が開いただけで捨てられたジャージ、踵を踏まれていた

二万のスニーカー、物に心があるならば、僕が大切に使うてあげたいと思った。

企業内学園ではこのジャージとスニーカーで過ごした。楽しい学園生活だった。私服を持っていない僕に、寮の仲間はいらない服をくれた。その度に、服をくれた子と入れ替わったような快さを覚えた。貧しくて惨めな生活しか知らない己が嫌いだった。決別したかった。人からもらった服、捨てた服を着る度に、下賤な自分とその間だけは別られるような気がした。

企業内学園を出て職場に配属され、何十年もたった。貯金をして大抵の物は買えるようになった今も、物の購入には億病だ。捨てることはなくとも、もらった古着ばかり着ている。あの時捨てたスニーカーの履き心地の良さは、鮮明に記憶に残る。捨てられていたものだとも忘れて重宝し、底が抜けるまで愛用した。

ゴミを漁るような、さみしく、さもない人間。僕は今も己を好きになれない。それでも生きてきたのだ。公園の集合写真のなかで笑っている僕。そのちよつと寂し気な笑顔を見ていると、精一杯生きてきた自分に、少しだけいたわりのような気持ちを持った。

優秀賞

靴が壊れた

岐阜市 山口 みゆき

六月の始め頃から夫は、横になっていることが多くなってきた。七十七歳の夫はしなければならぬ事もなく、私が何か言っても動じることもないので見守ることしかできない。

八月に入ると夫の体調は更に、悪化した。

「病院に行った方がいいよ」

「大丈夫、横になっていたら、良くなる」

私はただ、嫌な予感がしていた。

私たちは再婚同士で十三年がたっていた。その間、夫は一回も医者に掛かったことがなかった。頭痛とか、腹痛がしても市販の薬を飲んで治していた。

八月二十三日の明け方、私が寝ている横を夫がトイレに這って行く気配に、目が覚めた。

バタンと大きな音がした。

「どうしたの?..」

「立てれん」

壁にもたれて座っている夫の背中をさする。

「こんなことなら、死んだほうがええな」

「救急車、呼ぼうか?」

「あかん」

何もできない不安に眠れないまま、朝を迎えた。夫をどういう手段で病院へ連れて行こうかと考えあぐねていた。

以前、かかりつけの内科医で、包括支援センターという機関があることを教えてもらった。思い切つて、そこに行ってみよう。

「こちらの管轄ではないのですが、貴方が大変、お困りのようなので、私が同行して、ご主人を説得してもよろしいでしょうか?」

「助かります。よろしくお願いします」

様子が違うことに夫が、取り乱して怒ってくるかと身構えていた。けれども、全くそんなこともなく、救急車で病院に行くことを承諾してくれた。

そのまま、入院となった。

検査の後で私だけ診察室に呼ばれた。

「末期の末期の癌です。全身転移して治療はできません。

緩和ケアするしかありません」

医師が指差すパソコンの画面を私は見つめながら、うなずくしかなかった。やっぱり癌だった。冷たい汗が背中を流れた。ベッドに横たわる夫の脇の椅子に座る。

「心配かけたな」

ずっと強がりばかり言っていた夫の言葉に体中の緊張がほぐれて、涙が溢れた。

「よくもって、一か月です。最悪の場合、明日でもおかしくないです」

数日後、担当の医師から宣告された。

何かを察したのか、夫が私に言った。

「先に逝くけど、みゆきのお陰でこれまでこれた。おまえがおらんかったら、何にもできんかった。ありがとう」

私は夫の骨と皮だけになってしまった手を握りしめた。

「頑張つて、ようならなあかん。鰻、食べに行くんやろ」

「ようならならな」

八月になったばかりの頃、鰻が食べたいと夫が言っていたのを思い出した。

残された時間、私に出来る事は毎日、面会に行つて夫が望むことをしようと決めた。たいていは、足がだるいから、さすつてくれと言うので、腫れた足をさすつていた。

身体は痩せ細っているのに足だけが異様に太くなっている。

ある日、面会に行くとは病室の外からも聞こえるような大きな声で叫んでいた。

「みゆきい。みゆきい」

「呼んどったの?」

「どこ行つとたんや。呼んどつたんやに」

小さな子どもを抱くように両手で夫を抱きしめた。

私は骨ばつた夫の胸で涙をぬぐつた。

「もう帰るね」

「帰つたら、あかん。寂しい」

面会時間を超過していたが、私はまた、しばらく足をさすつてから帰ることにした。

頑固で融通が利かない夫に愛想が尽きて「もう、終わりにしよう」と私はヒステリックに大きな声をあげたことが、何回かあった。決して謝ってくることはなかった。

「心臓が止まりそうです」

一週間後、病院からの連絡で直ぐに駆け付けた。道中の車内で祈つた。

「直ぐに行くから、待つとつてね。一人でいかないでね」

病室の前で看護師さんが待つておられた。

「もうすぐ、奥さんがみえるで、頑張つて。と言つたらうなずいてみえました」

「今、息が止まりました」

まだ温かい手と顔を撫でた。

今にも起きるような顔をして眠っている。

火葬場の炉に棺が吸い込まれていく。

お骨になるまでに二時間ほどかかる。お骨を預かるための一式を手渡され、車へ向かう砂利道で靴に異変を感じた。何年振りか履いた礼装用の靴の底がボロボロと壊れていく。

新しい靴でひとりでも生きていきます。

優秀賞

うちのキジバト

大阪府 長瀬 安雄

『ハトに餌を与えないで下さい』。群れで糞害などを起こすドバトへの注意書きだが、キジバトは対象外だと思ふ。だってキジバトは群れを作ることはないから。

三年前、ツガイのキジバトが庭の木の上に巣を作り始めた。ハトの巣作りは下手とは聞いていたが、確かに大雑把な作りだった。案の定、強い風に煽られて吹き飛ばされてしまった。翌年も同じ場所に巣を作ったが、いつの間にか卵が落下していた。それからは巣を作ることなくなり、餌だけを啄んでいる。

今年の春、小柄な一羽のキジバトが新たにやってきた。とても人懐っこく『こはんちようだい』とヨチヨチと歩きながら後を追いかけてくる。

ある時、風で物置の戸が閉まる大きな音がした。確認のために妻が庭へ出るとこのハトもついてきた。戸を開けたと

たん、床一面に散乱した鉢や皿などが目に飛び込んできた。妻は思わずアツと声を上げた。すぐ横で覗き込んでいたハトもハツとした表情をしながら見上げた。ハトの目と妻の目が合った。

『大変だ！ おばちゃん！』と言っているようなハトの目はとても可愛かったんだよ』

それまでは玄関先で子育てに奮闘しているツバメを褒め、努力もせず餌をねだるだけのハトはグウタラだ、と非難していた妻の言動がこれを境に百八十度変わっていった。

『ハトの餌はまだあるの？ 買いに行かなくてもいいの？』と心配するようになった。愛嬌のいいこの子を「愛ちゃん」と名付けることにした。

さらに七月には突然、一羽のキジバトがやってきた。でも何だか様子が変。翼を地面に付けてひっくり返らないように支えながらヨタヨタと近づいてくる。右足の指が内側に変形していた。空腹を訴えているようだ。

このハトが現れたのは、兄の一周忌を済ませた翌日だった。兄は学校を卒業して半年後、交通事故に巻き込まれて身体障害者となった。懸命のリハビリを続け、壊れたロボットのようなだったが、自力で歩けるようにまで回復した。六十を過ぎた頃から車椅子の生活となり、とうとう寝たきり状態になっていた。

障害を持つキジバトがやってきたのは何かの巡り合わせかもしれない。歩行には苦勞しているようだが飛ぶのは支障ないようで、枝に止まる時はしゃがみ込んで器用にバランスをとっている。しばらくの間「足の悪い子」と呼んでいたが、よろめきながら片方の翼で支えているこの子を「翼くん」と名付けた。

うちのハトたちはガラス戸の前で行ったり来たりしながら『おっちゃん、来てるよ』とアピールすることが多くなってきた。その度に餌を与えるようにしているが、ドバトのように仲良く餌を啄むことはない。一羽が餌を食べていると、突然他のハトが現れて襲いかかり、追っ払ってしまう。それも羽毛が散乱するほどの攻撃を加える。はじめの頃は私を警戒をしながらビクビクと食べていると思っていたが、そうではなかった。他のハトの襲撃を警戒をしていたのだ。特にツガイのハトは『ここは昔から俺らの縄張りだぞ。来るな!』とばかりに執拗に攻撃をしかけてくる。見かねた私は、近づいてきたツガイのハトの間に立って攻撃できないように守ったこともある。

今年の夏は気象予報士が『命に関わるような猛烈な暑さです。不要不急の外出は控えて下さい』と呼びかけるほどの暑さだ。きつとハトも飲み水に困っているに違いない。とりわけ「翼くん」は水に不自由しているだろう。さっそく餌

場の横に水を用意してみた。どのハトも餌を食べ終わると、根元まで嘴を水の中に入れてゴクゴクと何度も飲んでいく。

最近、ツガイのハトのオスが、以前にまして独特の鳴き声を上げながら頻繁にメスに向かって求愛行動をするようになってきた。その度にメスは嫌がって逃げ出してしまふ。

ある日のことだった。そのオスが突然、少し離れた場所に隠れていた「翼くん」に向かって鳴き声を上げながら求愛行動を始めた。あれ? 「翼くん」、女の子だったのか。

盆を過ぎた頃だった。二羽のハトが仲良く餌を食べていた。いつものツガイのハトだろうと思ったが、違っていた。一羽はあの「翼」だった。彼氏ができたみたいだ。良かったなあ。ホッとさせてくれた光景だった。

ところで、我が家の犬は二年前に死んだ。いつもフェンス越しにお座りをして待っていた隣の犬も去年死んだ。私の姿を見ると喜んで飛んできた裏の犬も今年死んでしまった。庭に出る度に無性に寂しい気持ちになっていた。でも今は違ふ。『おっちゃん、餌ちょうだい』と近づいてくるハト、『早く帰ってきて!』と電線の上でじっと待っているハトが私の気持ちを明るくしてくれる。